

窯道具の使い方

会期／2023年6月10日（土）～9月3日（日）

この地域では「エンゴロ」って呼ばれています

ぼくたちを上手に使ってたくさん焼こう！



はじめに

窯道具とは、製品を窯で『焼く』ときに使う道具です。やきものが完成するまでには、大きく成形・施釉・焼成の3つの工程があり、中でも焼成が最も重要な工程と言われています。それは、いくら成形と施釉の完成度が高くても、焼成で失敗すると商品にはならないからです。一つでも多くの製品を「商品」にするため、いかに失敗を少なく、かつ限られた窯のスペースに沢山の製品を詰めることができるか。これがとても重要なことでした。

製品を窯に詰める作業は「窯詰め」と呼ばれています。窯詰めには、製品を裸で積み重ねる「裸積み」と、製品を匣鉢（さや）に入れて窯の中に積み上げる「匣鉢積み」の二種類があります。また、製品を匣鉢に詰める作業を「匣鉢詰め」と呼びます。窯詰めを効率よく行うため、それぞれの詰め方に適した窯道具が開発されました。こうして、製品の種類や、または時代により、様々な形や用途の窯道具が生み出されることになりました。

今回の展示では、これまであまり取り上げてこられなかった窯道具に注目して、窯道具からみた当時の陶工達の創意工夫を紹介します。

I 裸積みの時代（飛鳥時代から室町時代）

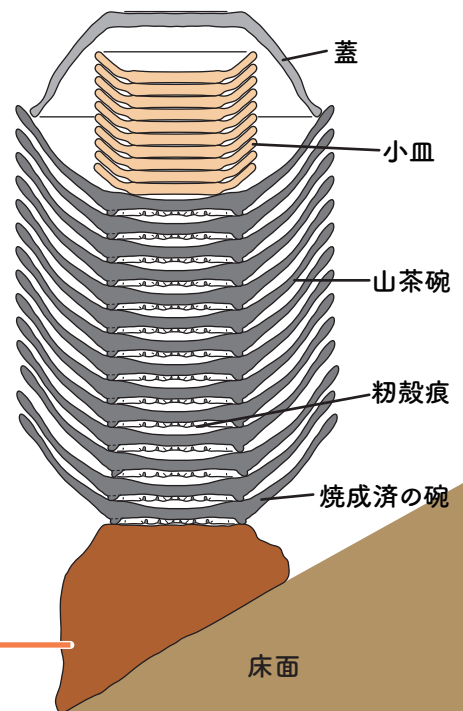
飛鳥時代から室町時代には、須恵器、灰釉陶器、^{すえき}緑釉陶器、^{かいゆうとうき}山茶碗が生産されました。これらのやきもの内、緑釉陶器以外は「裸積み」で焼かれました。

山茶碗の窯詰め

山茶碗の窯詰めは、間に稲の籾殻を入れ、碗を14～16枚程度重ねました。碗の最上段には小皿などを載せ、その上には蓋を被せました。焼台の直上の製品には、焼台に含まれている鉄分が付着する恐れや、積み上げた製品の重みによる変形があるため、焼成済の碗を使用しました。

焼台

窯の床面は傾斜しているため、上が水平で下が床面の傾斜にあった焼台の上に製品を乗せて焼成しました。



13世紀中頃